

幼児の非言語行動とその発達

記号学的試論 ②

友松 浩志

(真理学園)

〔研究目的〕

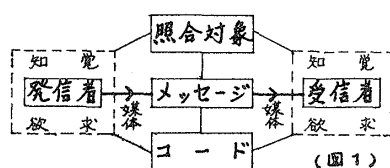
人間が互いに理解し合うことは、安定した人間関係を築く上で基礎となることである。自分の意志を相手に伝え、相手の意志を理解するために人間は言語を発達させて来た。しかし一方で、人間は言語以外にも様々な方法で意志を伝達し合っている。乳児と母親の間に見られるコミュニケーションでは、言語は付随的なもので、非言語的行動（表情、身振り、接触など）が相互の信頼関係を築く上で役立っている。本研究の課題は、幼児期における非言語行動（nonverbal behavior）を記号学的（semiotic）に分析し、その意味と限界を発達段階に沿って明らかにするところにある。なお本研究は本学会第39回大会からの継続研究である。

〔研究方法〕

- (1) 幼児（3;9-5;10）の幼稚園における生活場面及び保育者（含・実習生）の指導場面をVTRに記録した。（1987年10月-1988年1月/1日約1.5h×79日間）
・VTRの使用に際しては、幼児たちが慣れるまで空撮を行ない、撮影のポジションを工夫した。（※1）

- (2) 記録したテープから非言語行動を用いたコミュニケーション場面（126場面）を抽出し分析した。

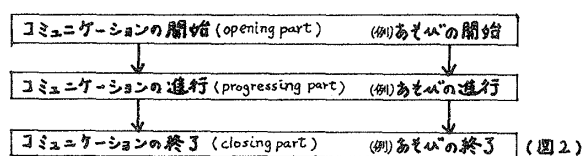
- ・分析にあたってコミュニケーションの構造を図1のように想定した。発信者から受信者に向う矢線がメ



ッセージ伝達の経路で、ここで非言語行動が媒体（伝達記号）として

使用された場合これを抽出したことになる。（※2）

- (3) 抽出した各場面について、非言語行動がコミュニケーションのどの部分で使用されたか、図2の想定に従って分析した。（※3）



- (4) 保育者（含・実習生）の幼児に対する非言語行動について、指導場面（9場面）を抽出し分析した。分析は各場面の状況の差が大きいため概要にとどめた。

〔研究結果〕

1. 非言語行動の使用場面

(表1)

対象	3 3	3 4	3 5	3 6	4 3	4 4	4 5	4 6	5 3	5 4	5 5	5 6	3 7	4 7	5 7	6 7	3 8	4 8	5 8	6 8	7 8	合計
開始節	19	1	1	21	2	21	1	24	7	1	32	40	4	2	3	9	8	5	4	17	117	
進行節	19	1	0	20	2	25	1	28	7	1	35	43	4	1	1	6	8	3	5	16	118	
終了節	6	0	0	6	2	13	1	16	4	1	21	26	2	1	1	4	3	1	2	6	58	
合 計	44	2	1	47	6	59	3	68	18	3	88	109	10	4	5	19	19	9	11	39	293	

4. 保育者の非言語行動 (指導場面)

観察 回数	対象	指導内容	笑顔	目く	首の表現	手の表現	指さし	手を取	接触	声	模倣動作	示範動作
a	8	3才	劇遊び	○	△	○	○	△	△	△	○	△
b	5	4才	読書	○	○	△	○	△	○	○	△	
c	3	3才	劇遊び	○	△	○	○	○	○	○	○	○
d	3	5才	ゲーム	△	△	△	△	○	△			
e	2	3才	ゲーム	△		△	○	○		○	○	○
f	2	5才	ゲーム	○	○	△	○	△		△		
g	1	4才	ゲーム	○	○	○	△	○	△	○		○
h	実	5才	フルーツ バスケット	△			○	○	△	△	△	△
i	実	3才	ゲーム	○	△	△	○	△	○	△	△	△

(○は少なからずあるもの、△は少なからずないもの、空欄はなにもないもの。実=実習生。)

〔考 察〕

コミュニケーションは、発信者が他者との関わりに対して何らかの欲求(動機)を持ち、それをメッセージとして何らかの方法(媒体)で受信者に伝達した時成立する。幼児集団の中で、年齢が増すに従って相互の関わりが増加することは予想された結果だったが(表1)、使用される非言語記号の数には差がなかった。関わり場面が増加するのに非言語記号が増加しない理由として、言語の使用・併用が考えられる。3才児ではたど近くに坐るだけでくあそびに加入されるが、4才児になると「何してるの」「入れて」等の言語を併用した方がよりスムーズにくあそびに参加できるようになる。5才児同士では、身体接触だけでは意志が伝わりず逆に「やめろよ」と拒絶される例も見られた。

非言語記号を分析するにあたって、言語にならって動作素(kineme)、動作形態素(kinemorphic)などを想定する研究も見られるが(※4)、ここでは大まかな分類を示した。(表2)首に腕を絡ませて床に転がっている場面は3・4才で多く見られたが、それが何のメッセージを伝えているのかはその前後の状況を見ていないと判断できないことがある。喧嘩で組み合っているのに、「気をつけてやってね」と誤解した保育者が言葉がけした場面も見られたが、非言語記号を特定のメッセージと結びつけて判断することは危険なことが多い。幼児においてく蹴るくぶつなどは親愛の記号の場合がある。喜びの記号としてはくその場での跳躍く走り出すく笑顔などが上げられる。く笑顔については既に生得的なものとする見方が定説となっている(※5)が、く笑顔以外の喜びの記号は年齢とともに減少する傾向が見られる。

コミュニケーションの各段階については、開始部と進行部がほぼ同数、終了部はそれらの半分しか抽出できなかった。幼児においてコミュニケーションの終了

(あそびの終了)は、次のコミュニケーションの開始である場合が多いため曖昧なことが多い。何となく離れていたり、別の方を向いてしまったり、特別な記号を必要としない。(手を振って別れたのは1例だけ。)

保育者の幼児に対する非言語行動について見ると、保育者は幼児の年齢よりも幼児の状態に対して反応して非言語記号を使う傾向が見られる。活発な幼児には言語によって対応し、不安そうな幼児に対してはく近づきく覗きこみく抱くなどの記号を多用する。指導場面では、指導内容、状況などに影響を受け、各保育者を比較することが出来ないが、静的な活動(言語発表など)では小さな非言語記号(手指の表現等)を用い、動的な活動では自分から動いて示範するなど、状況に対応した変化が見られる。経験年数による差は殆ど見られない。(※6)

〔まとめ〕

幼児のコミュニケーションの様子を見てみると、そこに言語が交されないのに立派に意志を伝達し合っている姿を見ることがある。(表3⑩)一方で一人果敢と付く幼児。コミュニケーションを開始するにはまずその欲求がなければならぬが、その欲求をメッセージとして相手に伝える手段もまた知らなければならぬ。「コミュニケーションは複数の回路を通じて行われる」(※7)と言われるが、幼児もその発達段階に合った多くの非言語記号を用いてコミュニケーションを行なっている。

しかし、メッセージの伝達において非言語記号だけでは不十分なこともまた明白である。幼児の行なう様々なくあそびくあふくたつた、握手くこにちは等が言語と非言語記号の併用の上に成り立っているのも偶然のことではない。言語によってしか知れないもの、言語によってしか楽しめないものが人間生活の大部分を占めている(※8)ことに幼児たちが気づくために、これらのくあそびは大いに役立っていると言えよう。

〔文 献〕

- * 1 Wallbott, H.-G. (1982): Technical appendix. Audiovisual recording: procedures, equipment, and troubleshooting, in Handbook of methods in nonverbal behavior research, Scherer, K.R. & Ekman, P. (ed.): Cambridge University Press, 542-579.
- * 2 ヤコブソン, R. (1960): 一般言語学, 川本次雄訳 (1973) みすず書房 183-227.
- * 3 東山安子 & フォード, L. (1982): あいさつにおける言語行動と非言語行動の日本比較, 言語, 131, 82-100.
- * 4 ナッポ, M.L.: 人間関係における非言語情報伝達, 牧野成一訳 (1973) 東海大学出版会, 92-117.
- * 5 アイケル=アイバースルト, I. (1970): 愛と憎しみ 人間の基本的行動様式とその自然誌, 日高敏隆訳 (1974) みすず書房, 44-48.
- * 6 Von Raffler-Engel, W. (1980): Developmental kinesics, in Aspects of nonverbal communication, Von Raffler-Engel, W. (ed.): Swets and Zeitlinger B.V., 133-153.
- * 7 オクサール, E. (1977): 言語の習得, 在田進訳 (1980) 大修館書店 27-71.
- * 8 ハヤカワ, 正一. (1979): ニヒク人間, 世と書房訳 (1980) 紀伊國屋書店 21-75.